

## もの言う牧師のエッセー 第334話

平昌五輪

### ⑤ 「太っ腹病院」

平昌で金、銀二つのメダルを獲得した小平奈緒選手は、2009年春、信州大を卒業したが就職先が決まらず難儀していた。就職先の条件が、コーチの指導を長野県内で受けさせてくれる地元企業。しかし、当時リーマン・ショックの不況に苦しんでいた多くの企業は、条件を受け入れてくれなかった。最後に望みを託したのが、彼女が大学時代に治療を受けた相沢病院だったが、相沢孝夫理事長は「長野県の若者が地元のコーチのもと、県内で一生懸命にスケートを極めようとする中で困り果てて助けを求めている。支えるのは当然。」と即決。

実は相沢氏も若い頃、挫折があった。東京慈恵医大を卒業したが、そのまま東京で最先端医学を学び、自らの専門である腎臓病の研究を続ける夢があり、米国留学の話もあったが、相沢病院2代目理事長である父、正樹さんが病で倒れ、やむなく故郷である松本に戻り、当時は大赤字だった同病院の経営を引き継ぎ苦労した。

小平選手は2009年4月16日付で相沢病院に職員として就職し、一定の就労も覚悟していたが、「あの時、もし支えてくれる人がいたら」と痛感している相沢氏は「スケートに専念したほうがいい」と、職員としての給与、長野市内での住居費、用具代で年間1000万円ほどを負担し、彼女がスケートに集中できる環境を確保。海外遠征時には、日本スケート連盟が用意したエコノミークラスの航空券をビジネスクラスにグレードアップし、2014年ソチ五輪後のオランダへの武者修行の間も、病院の留学制度を適用して給与を支払い続け、平昌には自ら右の頬に日の丸ペインティングをして駆けつけ、20人の病院職員らと声援を送った。

「小平選手が活躍すればするほど、患者が、職員が、そして私自身が、勇気と元気をもらっているんです。」と笑う。「病院が一方的に与えているなんて、とんでもない。私たちは互いに支え、支えられているんです。彼女を支えるため無理したこともないし、広告塔になってほしいなんてことも考えたこともない。どこの院長や理事長も味わえないことを味わわせてくれて、小平さん、ありがとう。」聖書には、

**「兄弟たち。あなたがたのことについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。そうするのが当然なのです。なぜならあなたがたの信仰が目に見えて成長し、あなたがたすべての間で、ひとりひとりに相互の愛が増し加わっているからです。」**  
第二テサロニケ1章3節、

とあるが、これは、自ら手塩にかけて育てた弟子に対しパウロが送った感謝の言葉である。一方的に与えたはずの彼が、逆に与えられた側の人の活躍によって元気付けられる。そして周辺に愛が広がっていく。世を沸かせた小平選手と李相花選手の友情も、そんな背景から生み出されたのかも知れない。太っ腹な相沢病院と、小平選手の触れ合いを見て、我ら人間が行くべき愛の道を垣間見た。 2018-5-4

